

氏 名	むら 上 昌 孝
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 128 号
学位授与の日付	平成 11 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 梵 語 学 梵 文 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	<i>Kautilīya Arthasāstra</i> 成立過程の研究

(主査)

論文調査委員 助教授 小林信彦 教授 御牧克己 教授 徳永宗雄

論 文 内 容 の 要 旨

古代のインドでは、人生の目的が三つにまとめられていた。人の道を踏み外さずに生活すること（ダルマ）、自らの利益を求めること（アルタ）、そしてセックスを楽しむこと（カーマ）である。この三つの分野は学問の対象となり、それぞれ学術書として体系化されている。ダルマの分野を代表する文献が『マヌ法典』であり、カーマの分野では『カーマスートラ』がよく知られている。アルタの分野での基準文献として、カーウティリヤの『アルタシャーストラ』が存在することは、諸文献に見られる言及や引用から知られていたが、テキストそのものは長らく失われていた。ところが、今世紀の初頭になって南インドで写本が発見され、シャーマシャーストリによって校訂本と翻訳が出版されて、ようやくその内容が世に知られるようになった。

『アルタシャーストラ』の著者と伝えられているのは、チャンドラグプタを擁立してマウリヤ朝を打ち立てた大策謀家カーウティリヤである。シャーマシャーストリはこの伝承を無批判に受け入れ、この文献の成立年代をマウリヤ朝初期の紀元前四世紀に置いた。そして、インド人研究者の多くはこれに同調した。ところが、この文献にはカーウティリヤを引用している個所がかなりある。このことを根拠にして、著者をカーウティリヤとする説に疑念が出された。また、この文献にはマウリヤ朝より遙か後代の状況を反映する記述が散在することから、紀元前四世紀成立説に対しても反論が出された。このように、写本発見の当初から作者をめぐる問題は『アルタシャーストラ』研究の中核課題であり、今日でも満足すべき解決に至っていない。この論文は従来とは違った視点に立ってこの問題に取り組もうとするものである。

第一部第一章では作者をめぐる伝統を取り上げる。インドの伝承によれば、この文献の作者はマウリヤ朝の宰相と同一人物であり、「カーウティリヤ」のほかに、「ヴィシュヌグプタ」および「チャーナキヤ」という異名を持つという。しかしながら、この文献の現行テキストで、「ヴィシュヌグプタ」という名前は作品の末尾に見られるにすぎず、「チャーナキヤ」という名前はどこにも見られない。

第一章第三節は本論文の中核を成すとも言える部分であり、有名な戯曲『ムドラーラクシャサ』を基に、『アルタシャーストラ』の作者について論議が展開される。チャーナキヤの登場する伝説は古くからあり、これを基にヴィシャーカダッタが戯曲『ムドラーラクシャサ』を著した。そして、「カーウティリヤ」と「ヴィシュヌグプタ」を「チャーナキヤ」の別名とする文献は、この戯曲だけである。村上によれば、「ヴィシャーカダッタの虚構の中で、伝説上の人物がカーウティリヤおよびヴィシュヌグプタと同一視されたという。

月が水星と接近することによって月食が避けられるという占星術の説を基に、「月になぞらえられたチャンドラグプタは、水星になぞらえられた賢者チャーナキヤの策略によって危害を免れる」というアイデアを作者は思いついたというのである。そして、賢者であることを示すために、チャーナキヤをカーウティリヤと同一視したことになる。そして、このアイデアが占星術に基づいていることを示唆するために、占星術書の著者ヴィシュヌグプタと同一視したことになる。

第一部第二章では、『アルタシャーストラ』の分量の問題が論じられる。さて、現行テキストの第一巻第一章第一八項目

には、この文献の巻・章・項目・詩節の数が記されている。ところが、ここで記されている詩節数は6000である。しかしながら、現行テキストは韻文だけで構成されているのではなく、詩節数6000というのは現行テキストの分量から考えてあまりにも多すぎる。村上によると、この記述は本来の状態を伝えるものではありえず、後代に挿入されたものであるという。さらに、第一巻第一章は大部分が巻名と項目の列挙から成るが、後代の改編者が文献本体にはめ込んだものであるという。

第一部第三章では、初めて編纂者を複数と考えたヒレブラントの説を紹介し、それに対する反論を検討する。ところで『アルタシャーストラ』では、カーウティリヤの見解が他の学者の説と対比的に示されることがよくある。ヒレブラントによると、このような形の記述となったのは、弟子たちが他説と対照して師匠の説を提示しようとしたからである。『アルタシャーストラ』は個人の著作ではなく、カーウティリヤ学派の人々が共同編纂したということになる。

第一部第四章では、シャルフェの提唱した「原『アルタシャーストラ』」について論じる。現行テキストの中核となったのがカーウティリヤ説であったとしても、それが単にばらばらの伝承に留まっていたのか、あるいはすでに学術書として纏められていたのか。これは議論の分かれるところである。シャルフェによると、6000詩節の韻文から成る「原『アルタシャーストラ』」がかつて存在し、大部分が散文に転換される際に、他から資料が補われたという。しかしながら、現行のテキストは韻文に換算したとしても4640詩節分しかなく、散文化された際に増広されたとは言えないのである。それに、改編と増補の証拠としてシャルフェが挙げる三箇所も、村上によると、散文より韻文の方が古いことを裏付けるものではない。

第一部第五章は第四章の補足である。現行テキストでは巻・項目の区分が実際の内容にそぐわない個所があり、シャルフェによると、これは原テキストが書き換えられた痕跡であるという。巻・項目の設定を後代編纂者に帰す村上はこれを採らず、元々の編集の際に資料が集まらなかった結果であり、後代編纂者が巻数項目数を恣意的に変えた結果であると考える。

第一部第六章では、この文献の成立過程に関する村上の論議がまとめられている。「(第一段階)カーウティリヤ説を中心に先行資料を編集して作成された『アルタシャーストラ』は、(第二段階)後代の編集者によって巻・章・項目の区分が操作され、冒頭部分と末尾部分が付加された。さらに、(第三段階)カーウティリヤがチャーナキャおよびヴィシュヌグプタと同一視されるようになってから、末尾で二つの韻文が挿入された」というのである。

この論文の第二部では、術語不統一の問題について論じている。『アルタシャーストラ』では、同一の対象を表すのに場所によって違う術語が当てられたり、同じ術語が場所によって違う対象を表したりすることがある。ここで村上が取り上げているのは、「スパイ」を表す語である。「スパイ」を意味する最も一般的な語は、“gūdhapuruṣa”など、“gūḍha”を前分とする語であるが、“apasarpa”や“yogapuruṣa”も用いられている。このような術語の用法は不統一であり、先行文献の違いに帰せられる。

第二部第一章では、“apasarpa”という語の用法を中心にこの問題が論じられる。“apasarpa”は編纂者自身の手になる文章にも用いられている語であり、資料と編纂の大枠の間で折り合いをつけた状況を知る手掛かりになる。さらに、“apasarpa”と“gūḍha[puruṣa]”/“yogapuruṣa”との併用例がある。村上によると、先行資料の段階では、任地が国内か敵地かによってapasarpaの任務が異なる。国内で任務に就く場合、任務は主として監視であり、長期にわたって対象人物の身辺に留まる。一方、敵国で任務に就く場合は、軍隊を城砦に導き入れるために工作をする。「城砦攻略法としてのapasarpa起用」という項目では、“apasarpa”という語が冒頭にあるというだけで先行資料を取り込み、項目と関係がない記述がなされている。きっかけさえあれば何でもかんでも放り込んで、できるだけ膨らまそうとしているかのようである。

第二部第二章では、“yogapuruṣa”とその女性形“yogastrī”の用法を論じる。「敵を不利益に導く工作員」を指して用いられる語が“yogapuruṣa”である。編纂者自身の文章では、一般的な密偵を指して“gūḍha-”を用いている。“yogapuruṣa”/“yogastrī”が現れる個所は、編纂者が主として用いた資料とは系統の異なる資料が使われている。ところで編纂者自身の文章で、“yoga”という術語が用いられていて、「神や聖者を使う秘密工作」を指す。ところが、同じ語を前分とする合成語“yogapuruṣa”は、そのような意味とは無関係である。このことから、“yogapuruṣa”が用いられている部分では、系統の異なる資料が使われたと考えられる。

論文審査の結果の要旨

『アルタシャーストラ』という文献は、野心的な国王のための政治論書である。利用すべき相手や敵対する相手を手なずけたり騙したりする方法が説かれ、権謀術数の限りを尽くすことが勧められている。また、国王の利益という視点から論じているにせよ、統治の方法が主題になっている以上、しばしば人々の生活状況に言及して、古代インドの社会について貴重な情報を提供する。この文献は長らく失われていたが、今世紀の初めに南インドで写本が発見された。

さて、紀元前四世紀にインド最初の大帝国マウリヤ朝が成立した。インドで広く知られている伝説によると、チャンドラグプタを初代皇帝に擁立した大謀略家がこの政治論書を著したという。そして、この人物の名前は「カーウティリヤ」とも「チャーナキヤ」とも言われ、また「ヴシュヌグプタ」とも言われる。この伝説に基づいて、インド人研究者の多くは、この文献の成立年代をマウリヤ朝の初期、すなわち紀元前四世紀末に置く。

しかしながら、『アルタシャーストラ』にはカーウティリヤ自身の諸説が数多く引用されているし、マウリヤ朝よりも後代の状況に言及する箇所もある。そこで、成立年代を紀元後三世紀まで引き下げる説も出されていて、この場合は当然ながらマウリヤ朝の宰相の著書ではないことになる。こうして、写本が発見されてから百年近くにわたって、多くの研究者が論議に参加し、いろんな角度から発言して、互いに激しく論駁し合ってきた。文献を多角的に検討するという点では、このような論議もそれなりの実りはあったが、肝心の作者の問題については、解決への道筋をつけることがますます困難になり、長らく膠着状態が続いていた。

この文献の作者には三つの名前があったと伝えられている。ところが、この三つがそろって現れる文献は、戯曲『ムドラーラクシャサ』だけである。この戯曲を詳細に検討した筆者は、この伝説が劇作家の虚構に帰せられることを明らかにした。劇としての効果を上げるために、主人公の謀略政治家を政治論の著者および占星術書の著者と同一人物として扱ったのである。互いに係わりのなかった三人の人物が劇の中で一人の人物に統合されたことになる。そして、この戯曲が流布した結果、もともと別々の人物を指していた三つの人名が同一人物の別名とされるようになったのである。

『アルタシャーストラ』の作者がチャーナキヤと同一視された時期について、バロウは『ムドラーラクシャサ』が成立した頃（六世紀?）と考えた。しかしながら、論証のすべがないとして、「この同一視が戯曲の作者ヴィンシャーカダッタに始まる」とまでは断定できず、それ以上の検討を諦めた。筆者は戯曲そのものを詳しく分析した結果、作者が意図的に三人の人物を同一化したと考えたのである。

『アルタシャーストラ』で扱われている事柄は驚くほど多岐にわたり、すでにあつた資料を用いずに一人の作者が全く独自に執筆したとはとうてい信じ難い。また、記事と記事の間に矛盾が見られる場合があまりにも多く、部分的な不一致などとはとうてい言えない。分野ごとに資料が集められ、それに基づいて編纂作業が行われたと考えるしかないのである。そうすると、先行資料の時代の違いによって、この文献の各部分もそれぞれの時代状況を反映していることになる。

『アルタシャーストラ』の記述を項目ごとに検討した筆者は、「編纂者は一貫した国家観に基づいて体系的な政治論を展開したのではなく、せいぜい編纂の大枠があつたにすぎない」と考えるようになり、その編纂過程について次のような仮説を立てた。それによると、この文献の編纂者は、まず巻と項目のおおまかな区分を立てた。そして、それぞれに相応しい資料を集めたが、項目によってはほとんど資料が得られない場合もあれば、詳細な記述を含む資料が手に入る場合もあった。それを配置し、自らの文章で繋ぎ合わせて『アルタシャーストラ』が成立した。

この仮説を確認する手段として、筆者は術語の用法に着目した。同じ事物を指して複数の術語が用いられることがある。また、これとは逆に、現れる場所によって同じ術語が別の対象を指すことがある。韻文部分でなら、「韻律を整えるために敢えて同義の別語を選んだ」という説明も可能であるが、散文部分で術語が不統一である理由としては、先行文献の違いとしか考えられない。

『アルタシャーストラ』を研究課題として取り上げた筆者は、写本発見時以来の研究史を検討した上で独自の方針で研究を進め、二つの面で成果を挙げることができた。一方では三つ名前が伝えられている理由を明らかにし、他方では術語用法の不統一を根拠に先行資料の存在を具体的に示した。こうして、停滞していた『アルタシャーストラ』研究に少なからぬ貢献をすることになった。しかしながら、この論文には問題が残されていないわけではない。取り上げた問題の性質上やむを

えない点もあるとはいえ、推測を提示するに留まっている個所があるのは残念である。伝承の過程で「カーウティリヤ」というサンスクリット名が「カーウタリヤ」という俗語形に代えられた理由について、サンスクリット語形の与える悪い印象を避けるためと言うが、特に根拠があつてのことではない。また、この文献の項目数が巻数の40倍に設定しているとするが、30倍ではなく40倍とした理由についての説明は、十分な説得力があるとは言い難い。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成11年3月5日に審査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。